

① 穴のある領域では、定理 3.3 (P87), 定理 3.4 (P89) の成立した  
 たい例 (cf P88 例 4.1)

例 1.1

$A = \left( \frac{y}{x^2+y^2}, -\frac{x}{x^2+y^2}, 0 \right) : (x,y) \perp$  以外では  
 滑らかなベクトル場

$\nabla \times A = \left( \frac{\partial A_z}{\partial y} - \frac{\partial A_y}{\partial z}, \frac{\partial A_x}{\partial z} - \frac{\partial A_z}{\partial x}, \frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} \right) = \mathbf{0}$

$\left( \frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} = \frac{\partial}{\partial x} \left( -\frac{x}{x^2+y^2} \right) - \frac{\partial}{\partial y} \left( \frac{y}{x^2+y^2} \right) \right. \\ \left. = -\frac{1}{x^2+y^2} + \frac{2x^2}{(x^2+y^2)^2} - \left\{ \frac{1}{x^2+y^2} - \frac{2y^2}{(x^2+y^2)^2} \right\} = 0 \right)$

であるが、 $(x,y) = (0,0)$  以外では滑らかなポテンシャル  
 持たない。

$\phi = \phi(x,y,z) = \arctan\left(\frac{y}{x}\right)$  ( $\arctan x$  は  $\tan x$  の逆函数,  
 $-\frac{\pi}{2} < \arctan x < \frac{\pi}{2}$ )

とすると,  $\begin{cases} x = r \cos \theta \\ y = r \sin \theta \end{cases} (r > 0, -\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}) \Rightarrow \frac{y}{x} = \tan \theta \\ \Rightarrow \theta = \arctan \frac{y}{x} = \phi$  となる

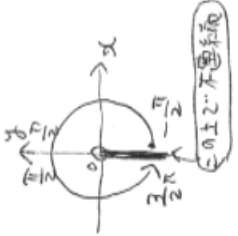
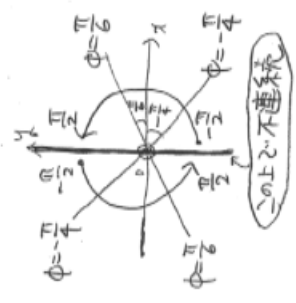
$\phi$  は右の方には  $x=0$  (yz 平面) で不連続  
 であるが、 $x=0$  以外では

$-\nabla \phi = -\left( \frac{-x}{1+(y/x)^2}, \frac{y}{1+(y/x)^2}, 0 \right) = A$

とされる。この方がスカラー場は  $\phi + C$  しかない。  
 yz 平面の  $y > 0$  の部分で連続に与えよう。

$\psi = \begin{cases} \phi & (x > 0) \\ \phi + \pi & (x < 0) \end{cases}$

とし、 $y < 0$  の部分では不連続と  
 考えよう。つまり z 軸を滑らかに一周するよう  
 ポテンシャルが作れない。



例 1.2  $A = \left( \frac{x}{x^2+y^2}, \frac{y}{x^2+y^2}, 0 \right)$  (z 軸以外で滑らか)  
 $\nabla \cdot A = \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{x}{x^2+y^2} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left( \frac{y}{x^2+y^2} \right) = 0$  であり、  
 本質的に  
 例 1.1 と同様  
 $P = (0, 0, \arctan\left(\frac{y}{x}\right))$  は  $\nabla \times P = A$  となり (略)

z 軸以外で滑らかなベクトルポテンシャルは存在しない

① 穴のない領域では、 $\nabla \cdot A = 0$  とき

- 1.  $P_0 = (P_x, P_y, 0)$  の形のベクトルポテンシャルが存在する
- 2.  $A$  の任意のベクトルポテンシャル  $P$  は  
 $P = P_0 + \nabla \phi$  ( $\phi$  は任意のスカラー場)  
 できらる。

( $\rightarrow$  具体的なベクトルポテンシャルの計算に使用)

① 定理 3.4 より  $A$  にはベクトルポテンシャルが少なくともひとつ  
 存在する。よって  $P_1 = (P_x, P_y, P_z)$  とする。よかに  
 $\psi = \psi(x,y,z) = \int P_z(x,y,z) dx$  とし、 $P_0 = P_1 - \nabla \psi$  とする

$P_0$  の z 成分  $= P_z - \frac{\partial \psi}{\partial z} = P_z - P_z = 0$  であり、仮定より  
 $\nabla \times P_1 = A$  から  $\nabla \times P_0 = \nabla \times P_1 - \nabla \times (\nabla \psi) = A$  とする。

2.  $P = P_0 + \nabla \phi$  とすると  $\nabla \times P = \nabla \times P_0 + \nabla \times (\nabla \phi) = A$  となる。  
 $P_0$  は定理 3.4 のベクトルポテンシャルとされる。  
 逆に、 $P$  を  $A$  のベクトルポテンシャルとすると、

$\nabla \times (P_0 - P) = \nabla \times P_0 - \nabla \times P = A - A = \mathbf{0}$  とする。  
 定理 3.3 により  $P_0 - P$  はスカラーポテンシャルと持てる。よって  $\phi$  と  
 すると  $P_0 - P = -\nabla \phi$  のよって  $P = P_0 + \nabla \phi$  とする。

(つまりこの形の式は常に  $A$  のベクトルポテンシャルであり、  
 逆に  $A$  のベクトルポテンシャルは必ずこの形の式に与える。)